

謝罪言語行動に関する日中対照研究：インターアクションの視点からの考察

著者	李 竺楠
ファイル(説明)	博士論文要約 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第47号
URL	http://hdl.handle.net/10232/00031936

学 位 論 文 の 要 旨	
氏 名	李竺楠
学位論文題目	謝罪言語行動に関する日中対照研究 —インターアクションの視点からの考察—
<p>本論文は、異なる言語文化間における言語行動の対照研究の一環として、日本と中国の謝罪言語行動を対象に行った実証的研究である。本論文では、熊取谷（1993）が構築した対照研究の枠組みをもとに、日中のテレビドラマから収集した謝罪談話をデータとして、「当該言語行動は何のために遂行されるか」、「どのような状況（誰が、誰に、いつ、等）が当該言語行動の遂行を誘発するか」、「当該言語行動の遂行に送り手と受け手はそれぞれどのような方略を使用するか」、「当該言語行動の談話はどのように構成されるか」という4つの課題を設定して、インターアクションの視点から対照分析を行った。その結果、それぞれの課題に答えることによって、熊取谷の枠組みが発話行為レベルだけではなく、言語行動一般の対照研究の基本的枠組みとして有効であること、また、言語行動レベルで対照研究を行うには対人的要素や言語の運用面への配慮をさらに強化させたインターアクションの視点を導入することが必要であることを論じた。本論文の構成は以下の通りである。</p> <p>はじめにでは、謝罪をめぐる言語文化間の異なりは多くは印象レベルで語られているだけであり、異文化間の相互理解を促進するには、言語行動としての謝罪の様相を対照的に研究する必要があることを論じた。また、本論文の構成と各章の内容について述べた。</p> <p>第1章では、まず謝罪は単なる発話行為ではなく、言葉によらない身体動作も含む言語行動のひとつとして捉えることを述べた。続いて、これまでの謝罪研究の動向を概観し、本論文を「謝罪の個別性に関する対照研究」と位置づけた。そして、言語行動の対照分析のために、熊取谷（1993）が提示した4つの課題を発話行為レベルから言語行動レベルへと広げる必要があること、そのためにはインターアクションの視点から捉える必要があることを論じた。</p> <p>第2章の「各課題に関わる先行研究の批判的検討」は5節に分けて論じた。第1節から第4節においては、言語行動の対照研究の4つの課題に関わる先行研究を批判的に検討した。その結果、「謝罪目的」は関係修復であること、また具体的な分析対象となる「不快状況」、「謝罪方略」、「応答方略」については、それぞれの分類基準と下位分類を明確にすることで、第3章～第5章で行う対照分析のための理論的基盤を準備した。また、課題4については熊取谷（1993）とは異なる見解があることに言及した（その議論</p>	

は第6章で行うことを付した)。最後の第5節では、本論文のデータ収集と分析の方法、および全体の構成について述べた。

第3章では、課題2「どのような状況（誰が、誰に、いつ、等）が当該言語行動の遂行を誘発するか」に答えるために、日中の「職場ドラマ」、「ホームドラマ」、「医療ドラマ」から収集した謝罪談話をデータとして、各作品に描かれる人間関係（「親疎関係」と「上下関係」）と不快状況の種類および深刻度の点から対照分析を行った。その結果、次のことがわかった。(1)謝罪の頻度と不快状況に関連は見られなかったが、頻度は日本のほうが高い、(2)不快状況には、日本ドラマでは上下関係と、また中国ドラマでは場面との関連が見られた、(3)不快状況の種類は日本ドラマのほうが多い、(4)不快状況の深刻度との関連では、「軽度」で日本ドラマに、「中度」で中国ドラマに謝罪が多く見られた。

第4章と第5章では、課題3「当該言語行動の遂行に送り手と受け手はそれぞれどのような方略を使用するか」に答えるために、2.3の「謝罪方略」及び2.4の「応答方略」の分類の枠組みをもとに、「家庭場面」と「医療場面」において、送り手の謝罪方略（第4章）と受け手の応答方略（第5章）が人間関係（親疎関係・上下関係）と不快状況の深刻度によってどのように異なるかを、方略の「種類」、「使用のあり方」、「組み合わせ」の3つの側面から検討した。その結果、(1)使用される方略の種類と深刻度には関連が見られた（深刻になれば方略の数が増える）、(2)方略は日中ともに「侵害」、「後悔」、「責任」の3つが中心であるが、重視される方略が異なることから、関係修復のプロセスにおける方略の優先順位が異なる可能性がある、(3)深刻度とターン数には関連がある、などの点が見られた。

第6章では、対照分析の課題1～課題3への答えを整理したうえで、最後に残された課題4「当該言語行動の談話はどのように構成されるか」について、熊取谷（1993：37）の「修復作業における談話プロセスの基本構造」と日中のテレビドラマの具体的な謝罪談話をういながら、送り手の謝罪方略と受け手の応答方略が「柔軟性」、「主導性」、「連動性」という3つの相互行為的特性とどのように関連するかを論じた。その結果を受けて、日中の謝罪に関する印象が異なる理由を、梁英聖（2019, 2021）の謝罪の過程を示すモデルに依拠して検討した。最後に、場や文脈、人間関係等を取り込んだインターアクションの視点を組み込んで、熊取谷（1993）を発展させた対照研究の枠組みを提示した。

おわりにでは、これまでの分析結果をまとめ、本論文の意義と限界、そしてこれからの課題について述べた。